國學院大學・皇學館大学連携　古事記学研究会

研究会討議総括・報告

渡邉　卓

本事業の一環として、平成二十九年十一月十九日（日）十三時三十分より、國學院大學渋谷キャンパス三号館三三〇七教室において、「國學院大學・皇學館大学連携　古事記学研究会」が開催された。本研究会は、本学と皇學館大学とが締結する研究協定に基づくものであり、両大学から発表者が登壇し、発表・ディスカッションを行うことで、『古事記』に対する理解を深め、本事業の成果を広く一般に公開することを目的とした。当日は約五〇名の参加者があり、発表後の約一時間にわたってのディスカッションでは、それぞれの分野から活発に意見が交わされた。

以下に、本研究会の報告を述べる。なお、発表者の肩書きなどは開催当時のままとする。

〈発表者〉

遠藤慶太（皇學館大学文学部准教授）

「垂仁紀の祭祀伝承　イニシキイリヒコをめぐって」

〈コメンテーター〉

谷口雅博（古事記学センター長・本学文学部准教授）

「『播磨国風土記』天日槍命と葦原志挙乎命の土地占有争い」

笹生衛（本学神道文化学部教授）

「考古学から見た祭祀・葬送の変革期と4世紀後半」

〈司会〉

渡邉卓（本学研究開発推進機構助教）

当日は本事業および両大学の研究協定についての説明ののち、基調発表として皇學館大学の遠藤慶太氏に発表いただいた。遠藤氏の発表は『日本書紀』垂仁天皇条（以下、垂仁紀）の異伝の理解を歴史学的立場から論じたものであり、「一云」から始まる記述を『日本書紀』のなかでどのように理解すべきかを中心に扱った発表であった。垂仁紀の「一云」は縁起や由来を説いたものが多く、さらに「今」はどうなっているのかに言及する傾向があることが指摘された。そして、そのような視点からアメノヒボコ伝承・石上神宮の縁起由来譚・垂仁天皇の陵墓に関する伝承などを考古学の成果と組み合わせながら考察を加えるとどう理解できるかが論じられた。

続いて遠藤氏の発表に対するコメントとして二人の本学教員による発表があった。まず、谷口氏は、垂仁紀のアメノヒボコ伝承が『播磨国風土記』に断片的に出てくるアメノヒボコ伝承と関わっていることを論じた。揖保川を遡る形で説話が配列されている『播磨国風土記』のアメノヒボコ伝承は、特に河口付近にあたる粒丘の説話が新しく付

け加えられたと考えられること、そしてアメノヒボコがアシハラシコヲと対立するという『播磨国風土記』独自の構想は、アシハラノシコヲが〈葦原中国の勇猛な兵士〉という神格を帯びているため渡来神であるアメノヒボコと対立する形を取るに至ったと考えられることなどが論じられた。

次に笹生氏のコメントは、考古学の立場から石上神宮・布留遺跡の調査研究についての紹介、そしてそれらと陵墓・古墳に関する伝承がどう関わるのかを論じるものであった。石上神宮の祭祀は四世紀がひとつの画期と考えられること、そしてその画期は神祭り・祖（死者）の祭祀に対する全国的な変化と関わっており、『古事記』『日本書紀』の記述にまで影響を及ぼしていると考えられることが論じられた。スライドによって多くの画像や地図が紹介され、参加者の理解が促進された。

以上の三氏の発表の詳細は本号に論考として掲載されている。

発表後に行われたディスカッションでは、まずコメント発表を受けて遠藤氏が所伝の成り立ちや、文献と現物史料の差異や扱い方について自身の考えを述べた。そのなかで遠藤氏は、原田敏明の説を引きながら『日本書紀』の本書と一書・一云、また『古事記』の資料的性格の違いがあるとした上で、谷口氏に『播磨国風土記』などの地方伝承としての神の描かれ方について質問が及んだ。谷口氏からは、「一云」という表現が異伝として捉えて良いものなのかという疑問が投げかけられ、異伝であっても文献内で様々なレベルが考えられることが指摘された。史書の編纂にあたっては漢籍の影響があり、そこには註が施されていることから、『日本書紀』の本書と一書のような伝承の異なるものが、あたかも註釈のように本文として取り込まれたことも認められるからである。また、統一がなされていないのも史書の形といえる。そこで谷口氏は、「風土記」編纂と『日本書紀』編纂が接近した時期で行われたことを前提

として、地方の史料の他に、中央が編纂した史書の原資料なども見ていた可能性もあること、また『播磨国風土記』も内部の用字法から編纂に位相があると指摘されていることに触れ、伝承と編纂との関係について考えを述べた。

次に、このような文献の差を承知した上で、アメノヒボコ伝承の性格の違いについて引き続き議論が取り交わされた。類似の伝承が諸文献にみえる渡来者の伝承は、渡来文化との関わりの中で、どのように考えられていたのかという観点で議論が交わされた。それぞれの文献の語り口が挿入譚のようでもあり共通するものの、アメノヒボコを人とするか神とするかで扱われ方が異なっている。谷口氏からは『播磨国風土記』が神として描くということは、祀られる対象であったことを意味しており、これも地方性の一つであることが指摘された。

その流れから、司会者からアメノヒボコがもたらした宝物が文献によって異なることや、神宝が神として祀られることについて確認があると、議論は神宝と祭祀について及ぶこととなった。笹生氏からは、神宝には、神の御霊が入り込むような、象徴的な要素が必要であるとの指摘がなされた。これは特に鏡・玉・剣に顕著に顕れ、国家形成期に伝来された器物が、そのまま神格化されてゆく可能性があるという。だからこそ、宝物を収める神庫が重要になってくるのである。大陸由来の品が、祭祀に用いられることについては沖ノ島の遺物などからも指摘でき、五世紀の神祭りの変化や幣帛の原形などについても紹介があった。

アメノヒボコ伝承が『古事記』では応神天皇条に配されることについては、渡来文化について盛んに描かれる天皇条であることから、その理由を推測することはできる。一方で『日本書紀』では垂仁天皇条に配されており、アメノヒボコ伝承の後で同じく垂仁天皇条に登場するタジマモリとの関係についても話題が及んだ。これは『日本書紀』の垂仁天皇像が『古事記』とは異なることからも祭祀と渡来文化との関わりについて考察する必要を示していると思われる。

一方で、説話が描く祭祀の状況には、実際の土地の問題も内包されており、今回の研究会で中心的に取り上げられた石上神宮の問題も、祭祀活動の場所や、宝物、神庫などを総合的に考える必要があろう。笹生氏からは、川沿いの祭祀の意味として水源が稲作につながること、水の流れには山が必要であることから、まさに山口での祭祀が石上と合致することについて話がなされた。これは大和に限ったことではなく、考古学の調査からも同様の社地が全国に存在するという。これを受けて遠藤氏からは、古代の人々の生活は川筋によって集団化しており、律令制にあってはそれをもって区画としている可能性があること、そして、その川筋の源に祭祀の拠点が置かれたことが付け加えられた。また、谷口氏は川が交通路として機能することから、人の生活と神話の残存状況について話された。

ディスカッションの終盤には、神話の伝承から祭祀伝承と氏族の関わりについて話題が及び、石上の伝承にまつわる物部氏のあり方についても意見が交わされ、説話内での物部氏の姿や古代氏族が担った役割などについても議論が及んだ。全体を通して、考古遺物から見る祭祀、説話に取り込まれた祭祀、また渡来文化との関わりといった多岐にわたる領域で意見交換が行われた。

この度の研究会では、本事業が目指す学際的研究の名の下に、双方の大学の研究成果を共有することができた。一つの文献を取り上げ議論することも必要であるが、諸文献を比較し、かつ諸分野から考察を加えることで、今回の研究会で浮き彫りとなった問題点もある。今後も本学と皇學館大学の研究協定に基づき、このような研究会が重ねられることを願っている。